

白井 勝也（しらい・かつや）先生

株式会社小学館 取締役副社長

【現職】 株式会社 小学館 取締役副社長

【本籍地】 東京都

【生年月日】 1942 年 生まれ

【略歴】

昭和 43 年 3 月 立教大学 文学部 卒業

昭和 43 年 3 月 株式会社 小学館 入社

昭和 56 年 5 月 ビッグコミックスピリッツ 創刊編集長

平成 6 年 5 月 株式会社 小学館 取締役就任

平成 11 年 5 月 同 社 常務取締役就任

平成 13 年 5 月 同 社 専務取締役就任

平成 21 年 5 月 同 社 取締役副社長就任

現在に至る



〈講義概要〉

株式会社小学館の取締役副社長として出版業界の第一線で活躍する白井勝也氏が、出版メディアの現状や書籍の電子化について講義を行った。

講義ではまず、日本のコンテンツ産業とデジタルコンテンツ産業の市場規模やその推移について詳細な資料を用いて分かりやすく説明。また、日本のコミック市場や出版市場の現状についても具体的に解説し、今後の出版産業において、新しい時代に適応する魅力的で強力なコンテンツを生み出すことや、あらゆるコンテンツの原作として活用が可能なコミックや小説を中心にクロスメディア展開を行うことが重要なポイントであることを示した。

続いて、コミックの海外での人気に対してマネタイズできていない実態を紹介し、デジタル化に伴いますます深刻化するネット上の海賊版問題への対策が急務であることを訴えた。

最後には、電子出版の現状や出版産業の今後の課題について言及し、出版社に著作権隣接権を設定する必要があること、コンテンツを簡便に読者に提供する業務フローの構築が求められていること、紙の本と電子の本の共存が出版文化を守る上で重要であることなどを示した。学生はデジタル時代における出版メディアのあり方について、消費者とは別の視点から見つめ直す機会となった。

《受講生の感想》

● 多くの人に愛されるものは次世代へと続いていくものであり長くヒットすることが分かりました。また、映画でヒットすれば書籍が売れる、書籍が売れると映画になるというように単体ではなく連動していることを知りました。海賊版や無料など、作者などに還元されないということはあってはならないことなので、対策が必要だと思いました。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

● デジタル化は避けて通れないものであって、作家は、やっぱり紙で自分の作品を読んでほしいと思われる方もいるし、自分の作品を読んでもくれるならば、その媒体は特にこだわらないという方もいることを知り、デジタル化がはじまったばかりなので、まだ様々な意見があるのだということを知り、勉強になりました。また、紙と電子の共存が望ましいというお話しは、私も共感しました。 立命館大学・産業社会学部・3 回生

● 今やマンガ喫茶や古本屋で、無料あるいは低価格で興味のあるマンガやコミックを読むことができるようになってきています。しかし、このことによって、作者に報酬が行かず、新たな作品が生み出せない、新しい作家が誕生しないという問題を生み出していることを知りました。作者・作家のために購入をすることが新しい作者、作品の出現に繋がり、最後は自分たちに良い意味で返ってくることも分かりました。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

● 海外の市場での日本のコンテンツの海賊版の流通について、音楽 CD やファイル、映画、テレビだけでなく、コミック界でも海賊版の流通がここまで深刻化しているとは思いませんでした。私は映像学部という学部でコンテンツを自分たちで制作し、発信する側になりたいと思っているので、このような問題に対して、すごく悲しい気持ちになります。このような問題を解決するには、作者が作った作品に対価を支払い、よりよい作品を生み出すというサイクルを消費者に理解させることが大事だと思いました。

立命館大学・映像学部・2 回生

● 音楽産業がデジタル化によりパッケージが減少しているように、コミック誌なども減少しつつあるが、コミックスは今も市場を維持できていることに驚いた。出版業もマンガを中心に海外へとマーケットを拡大させているが、その中でも海賊版の問題はとても大きな問題であると感じた。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

● 有料にしないと次の作者が育たない、出てこないという点にとっても納得したし、大変なことだと思いました。10 冊出したら 4 冊返ってくるというほど返本があると聞き出版社業界の厳しさを知り、時代の変化に対応していく必要があることを感じました。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

